⑺　ずわいがにの動向

我が国周辺水域のずわいがには、日本海大陸棚の縁辺部、大和堆、銚子以北の太平洋岸及びオホーツク海の水深150～750メートルの範囲に分布し、生息域の分布によって、オホーツク海系群、太平洋北部系群、日本海系群及び北海道西部系群に分けられる。資源の状況をみると、この中でもっとも資源の大きな日本海系群は、富山県以西（Ａ海域）では1990年代後半から資源は回復傾向にあり、2000年代に複数の豊度が高い年級群が加入したことにより、以前は低位であった資源水準が中位に回復した。しかし、2007年から加入量が減少しており、資源動向は減少と判断される。新潟県以北（Ｂ海域）では、資源水準は中位、動向は横ばいと判断される。また、オホーツク海系群の資源水準は低位で動向は増加、太平洋北部系群の資源水準は中位で増加、北海道西部系群の資源水準は中位で横ばいであると判断される。

２　第２種特定海洋生物資源ごとの動向

⑴　日本海西部海域のあかがれいの動向

日本海西部海域のあかがれいは、当該海域の水深150～900メートルの広範囲にわたり分布している。当該海域のあかがれいを主として漁獲する沖合底びき網漁業の漁獲量は、データが揃っている1991年以降の新潟県以西の漁獲量をみると、1995年頃まで増加を続け、その後は3,000トン台で安定していた。近年は卓越年級群の加入により動向としては増加傾向にあり、2008年の漁獲量は近年では最高の約5,600トンであった。しかし、沖合底びき網漁業のみで5,000トン以上漁獲していた1980年代前半と比べると、資源水準は依然中位であると判断される。

⑵　宗谷海峡海域のいかなごの動向

宗谷海峡海域のいかなごは、当該海域の水深40～80メートルに分布している。当該海域のいかなご類の漁獲量は1995年の52,000トンをピークに減少傾向にある中で、2007年は約16,000トンと前年を大きく下回ったが、2008年は約15,000トンと前年と同程度であった。

資源状態の指標である沖合底びき網漁業（１そうびき）の過去のＣＰＵＥ（１網あたりの漁獲量）の動向や近年の漁獲物体長組成などから資源水準は低位、動向は横ばいと判断される。（いかなご類（いかなご及びきたいかなご）の資源評価による）。

⑶　太平洋北部海域のさめがれいの動向

太平洋北部海域のさめがれいは、当該海域の水深150～1,000メートルの広範囲にわたり分布している。当該海域のさめがれいを主として漁獲する東北海区の沖合底びき網漁業による漁獲量は、1978年の6,300トンをピークにその後年々減少し、1998年には108トンまで減少した。その後、やや増加し、2008年には276トンとなっている。

漁獲量が極めて少なく、資源水準は低位である。また、沖合底びき網漁業のＣＰＵＥ（１網あたりの漁獲量）についても特に変化は認められず、資源動向は横ばいと判断される。

⑷　瀬戸内海海域のさわらの動向

瀬戸内海海域のさわらは、冬を紀伊水道以南の太平洋沿岸及び伊予灘・豊後水道域で過ごし、春には紀伊水道及び豊後水道を経て内海へ来遊し、秋に外海へ移出する。

瀬戸内海におけるさわらの漁獲量は、1986年には6,378トンであったが、1998年には199トンにまで減少した。その後は徐々に増加し、2004年は1,465トンまで回復したが、2008年には1,120トンとなった。資源量は、1998年を最低水準として2003年には3,648トンまで回復したが、その後は緩やかに減少しており、2007年は2,794トンとなったが、2008年は4,054トンと増加した。これらにより、資源水準は低位、動向は横ばいと判断される。

⑸　伊勢湾・三河湾海域のとらふぐの動向

伊勢湾・三河湾海域のとらふぐ資源は、不定期に発生する卓越年級群の動向により大きく変動する。1999年及び2001年級群が卓越したことによって、2002年及び2003年漁期の資源量は高い水準にあったが、2002年級群が平年並み、2003年～2004年級群は低い水準にとどまった。2005年級群がやや回復傾向を示すとともに2006年級群が比較的大きい規模で加入したことから資源状態は好転し、その後、安定的に推移している。従って、資源水準は中位、動向は横ばいと判断される。

⑹　日本海北部海域のまがれいの動向

日本海北部海域のまがれいは、当該海域の水深150メートル以浅に分布している。当該海域のまがれいの漁獲量が把握されている1980年以降の新潟県と秋田県の漁獲量の推移をみると、1986年と1994年に漁獲量のピークが見られるものの、1994年から1997年に大幅に減少し、その後緩やかな減少傾向が続いていた。1993年以降データが揃う４県（青森～新潟）の漁獲量は、2005年に251トンと過去最低を記録したものの、近年は300トン台で概ね推移している。

これら漁獲量の推移や小型機船底びき網漁業及び沖合底びき網漁業のＣＰＵＥ（１網あたりの漁獲量）から、資源水準は低位、動向は横ばいと判断される。

⑺　周防灘海域のまこがれいの動向

周防灘海域のまこがれいは、当該海域の沿岸から沖合の水深10メートル以深に生息している。当該海域のまこがれいの漁獲量が推定されている1980年以降の推移をみると、1980年の713トンをピークに減少を続け1993年に一時的に回復したものの、1994年から再び減少し、2004年には127トンまで減少したが、その後増加し、2006年は219トンとなった。

大分県で調査されているコホート解析から求めた資源量推定値の結果等から、資源水準は低位、動向は横ばいと判断される。

⑻　太平洋北部海域のやなぎむしがれいの動向

太平洋北部海域におけるやなぎむしがれいは、当該海域の水深50～200メートルで漁獲される。やなぎむしがれいを主として漁獲している沖合底びき網漁業による漁獲量は長期的に大きく変動しており、近年では1990年代中盤から急激に増加し、1998年～1999年には240トン以上となり、過去最高の漁獲を記録した。その後減少に転じ、2001年～2007年には76～106トンで比較的安定しており、2008年は118トンとなっている。

沖合底びき網漁業の漁獲量とＣＰＵＥ（１網あたりの漁獲量）の変化から、資源水準は中位、動向は増加と判断される。

⑼　太平洋南部海域のやりいかの動向

太平洋中・南部におけるやりいかの漁獲量は、1990年代以降急減して、両海域での漁獲量の合計が1,000トンを下回るようになり、近年では206～863トン前後で推移している。

2006年に入って中・南部海域において豊度の高い発生群が出現し、2006年の漁獲量は、534トンに増加し、2007年にはさらに863トンにまで増加したが、2008年には600トンと減少した。このことから、南部海域を含む太平洋全体の資源水準は中位、動向は増加と判断される。

第３　第１種特定海洋生物資源ごとの漁獲可能量に関する事項

１　漁獲可能量の設定は、当面の間（19年以降５年間程度）第３の２の漁獲可能量の設定に係る第１種特定海洋生物資源の中期的管理方針に沿って行うものとする。

２　漁獲可能量の設定に係る第１種特定海洋生物資源の中期的管理方針

⑴　さんま

漁獲量の増大により漁獲金額が減少する傾向が顕著であることから、将来に向けて安定的な供給を確保する観点から、資源に悪影響を与えない範囲内において、漁獲可能量を安定的に設定するものとする。

⑵　すけとうだら

日本海北部系群及び太平洋系群については、近年の海洋環境等が資源の増大に好適な状態にあるとは認められない。このため、資源水準の低下が顕著となっている日本海北部系群については、資源回復計画に基づく取組により、資源の減少に歯止めをかけることを目指して管理を行うものとする。太平洋系群については、資源の回復を基本方向としつつも、回復のための措置が関係漁業者の経営に大きな影響をあたえる場合には資源水準を維持する等回復のスピードに十分配慮して、管理を行うものとする。

その他の系群については、ロシア共和国連邦の水域と我が国の水域にまたがって分布し、同国漁船によっても採捕が行われていて我が国のみの管理では限界があることから、同国との協調した管理に向けて取り組みつつ、当面は資源を減少させないようにすることを基本に、我が国水域への来遊量の年変動にも配慮しながら、管理を行うものとする。